

米国学会にみる昨今の研究事情

赤坂 喜清

東邦大学医学部医学研究科先端医科学研究センター組織修復・病態制御学研究室

今年の米国の創傷治癒学会は4月5日から9日まで San Diego で開催された。San Diego は西海岸特有の快晴の日々が続く心地よい気候から人口が急増しており、最近カリフォルニア州でロサンゼルスに次ぐ2番目の人口からなる活気に満ちた都市である。メキシコ国境に近いせいか、メキシコ人や中南米の人々が集う多国籍の雰囲気が強く、日本人の私が歩いても疎外感がなかった。軍港を含む広大な軍関連施設が隣接しており治安が大変良い。また西海岸の人々の陽気な気質とともに大変親切心に溢れており、紙幣不足で乗車できない観光客に市民が不足分を差し出した場面には大変驚いた。

学会は初日から特別講演やシンポが目白押しであり、どれも聞き応えのある発表だった。米国学会の特徴として境界領域の研究を多角的に検討して新たな解決策を見出したとの意向があるようである。実際今回も米国の炎症、免疫、再生など第一線の研究者が、それぞれの領域から創傷治癒の正常メカニズムや疾患の病態解明にアプローチしていた。印象的だったのは Stanford の免疫学者が Langerhans 細胞による表皮再生のメカニズムを、また UCLA の神経学者がデジタルイメージングを駆使して損傷皮膚の神経再生のメカニズムを解明したのは大変興味深かった。かつてのサイトカイン同定による創傷治癒学のめざましい進歩は過去のものとなり、境界領域研究の多面的なアプローチから新たな創傷治癒学のブレイクスルーの糸口を模索し

ている印象を受けた。

日本の学会とは異なり重要課題のシンポジウムが大半を占めており、選定された演者による講演が毎日の午前午後に行われる。多くの演者は有名な Journal で拝見する先生であり、問題点を徹底的に追求する姿は日米の違いを痛感させられる。昨年の病理学講座講演会の演者であったピッツバーグ大学医学部の玉真健一先生によると、シンポジウムの演者の多くが年3回の NIH 研究費申請の審査を務め、彼らの講演内容は今後の申請内容や方向性、採択基準の動向を把握するに大変役に立つようである。米国の学術集会在競争的研究資金獲得に直結している印象を受け、今後の学術集会の方向性について考えさせられた。

今回の学会で知り合った米国の先生から、最近の米国は研究資金の獲得が大変困難で、高騰する学会参加費や宿泊費から毎年の本学会参加が難しくなってきたと嘆いていた。学会理事長の Laura Parnell 先生も米国における近年の厳しい研究環境変化による研究者の減少を嘆いていた。この現況打破のため、学会の下部団体を立ち上げ、広範な社会的啓蒙を行うことで学会の認知度や重要性を高め、研究者の研究環境の改善に着手しているようである。日本でも同様な状況は否定できず、私も個人的にこの理念に強く賛同するとともに、日本の研究者も今後社会に向けた情報発信を怠ることなく高めていく必要性が感じられた。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2017.64-03-159